

第 43 号

発行所

茨城県筑西市下山590
茨城県立下館第一高等学校

紫西同窓会

TEL (0296) 24-6344(代)

FAX (0296) 25-4673

編集兼発行責任者

高野良則

印刷所 戸頃印刷所

紫西会報

我が母校創立

九十周年を迎えて

紫西同窓会長 中山 喜一郎

(三十一回卒)



我が母校は本年度創立九十周年を迎え、記念式典を十一月十六日(土)に挙行する事になりました。同窓会、PTA、そして学校側の三者が協力し合い、式典を成功させるために努力している所です。その準備をするにあたり、ひと口に九十年といっても様々な変遷があった事を実感しています。

昭和二十八年、私が下館

一高商業科二年生の時に創立三十周年を迎えた時には、作家の串田孫一先生をお招きして、講堂で講演をお聞きしました。串田先生は登山家としても有名な方で人生は山登りと同じ、一歩一歩慎重に踏みしめて頂上に向かい、又、下りも安全を期して下山しなくてはと力強くおっしゃっていました。あれから六十年、私も後期高齢者の二年目を迎え、人

生の山を下っています。何をすれば残りの人生を有意義に過ごせるか模索している所です。そこで、昨年は、東日本大震災の被災地、岩手県・宮城県を訪ねました。テレビの映像や報道写真は目にしました。が、実際に海岸線で津波の恐ろしさを目の当たりにして愕然とし、報道で知のとと実際に見るのとの違いを痛切に感じました。被災者の仮設住宅を三箇所ほど訪ねた際には、自宅から持参したタオル、敷布、皿、鍋などを少しばかりですがと置いてきましたが、帰り際に丁寧に頭を下げて見送ってくれた皆さんに感動し、とても良い気持ちで帰途につく事ができました。

また、九十年の歴史の中には、時代によって大変苦勞した先輩達がおりました。中でも、昭和十七、十八、十九、二十年に在学した方達の苦勞は筆舌に尽くしがたいものがあります。同窓会の会長をしているおかげで、昨年末、下館一高紫西同窓会水戸支部総会に招待されて出席した折に、私より一〇歳〜一二歳先輩のお話を直接聞く機会を得ました。そのお話に私は驚きの連続でした、第二次世界大戦の終戦を迎えた昭和二十年八月十五日、学徒出陣として満州(現・中国東北部)にいた先輩達(当時十六〜十七歳)は侵攻してきたソ連軍に貨物列車に乗せられ、ウラジオストクから日本へ帰れると思って喜んでいたら、とんでもない、到着したのはシベリアだったそうです。冬はマイナス二十度〜三十度にもなる極寒地で、食料も充分に与えられず、毎日二人一組で直径一メートルもある樹木を伐採して一定の長さで切る労働を課せられ、一日のノルマが終わらなければ休むことも出来なかったとのこと。中には栄養失調と重労働の為に亡くなる方も多数いらしたそうです。そういった生活を三年間続けて、やっと本土日本に帰還できたと聞き、その苦勞に自然に頭が下がる思いでした。兵隊さんにならなかった先輩達も、川島にあった軍需工場での作業や、太田地区の下

館飛行場で飛行機のエンジン整備の手伝いなどにあたり、日本国民総動員の態勢で重労働に励んだそうです。私自身は下館国民学校三年生の時に終戦を迎え、戦後の混乱期を小・中学生として過ごしましたが、戦地に赴いた方々はもちろん、戦争のために重労働に付いた先輩諸兄には本当に頭が下がります。

本年度卒業される二百八十名の諸君は、それぞれ違う道に進むかもしれませんが、歴史ある下館一高で共に学んだ事を誇りに、大学生として社会人として一歩一歩を慎重に踏みしめて生きていってほしいと思います。

紫西同窓会の皆さんにも、今年十一月十六日に開催される九十周年記念式典には万障繰り合わせて御出席いただき、母校の歴史に思いを馳せていただければ幸いです。



ごあいさつ

校長 原

篤 範

(四十八回卒)



紫西同窓会会員の皆様には、常日頃から本校の教育活動にご協力、ご支援を頂きまして誠にありがとうございます。お陰をもちまして、生徒諸君は滞りなく日々の学習、部活動に邁進することができています。あらためて感謝申し上げます。

〇 創立九〇周年について

本年九〇周年を迎える下館一高の歴史は、地元人材を輩出する学校として、時代の要請を受けて、商業学校、工業学校と幾多の変遷を経てまいりました。そして、平成二年度に定時制課程がなくなり普通科単独校となったことは、本校が目指していく将来の方向を強く意識させるものでした。それは、国や世界に貢献しうる人材を今まで以上に育成することを目指して学

校づくりをしていかなければならないのではないかとということ。高校教育の目標は中学校の基礎の上に高度な普通教育を施すことですが、「高度な」とは何なのか、自立を最終目標にして人格の形成を目指していかないと高校教育の目標の達成はないのではないかと感じています。地元の進学校という意識から脱皮して、本当の意味の人づくりをしていかなければいけないと強く思います。そのためには確固とした学校文化を持つこと、あの学校で学んだのだから大丈夫と思わせるだけの学校力を持つことだと思えます。九〇周年はその確認の機会にしたいと考えています。これから一〇〇周年に向けて学校の在り方を真剣に考えなければならぬと思います。

創立九〇周年に向けて、去る平成二四年二月一七日第二回実行委員会が本校会議室で行われました。同窓会役員、PTA役員及び本校職員の出席のもと、各係の進捗状況について説明がなされ、話し合いがもたれました。記念式典は平成二五年一月一六日土曜日に行われます。式典の次第等については招待者を含めて今後作業を進めていくことで了承を得ております。また、講演会については本校の卒業生にお願いすることで交渉を進めていくことになっております。記念事業としては、L教室を全面的に改修し学習室とすることが確認され、記念誌については、約三〇名の方に寄稿して頂き編集することとして、依頼を済ませております。滞りなく周年行事を実施し、次の時代に向けて下館一高の発展に繋げるため、会員の皆様の尚一層のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

〇 在校生について

平成二四年四月九日二八〇名の新生を迎えました。彼らには勉学に部活動に精一杯のエネルギーを傾注して、一日も早く館高の主力として活躍してほしいものです。総勢八四〇名で今年度もスタートしました。

春の話題をさらったのは硬式野球部でした。春季野球大会に県西地区を勝ち抜き県大会に出場、下館一高ベスト８進出という朗報がもたらされました。夏の大会にはシードされ、初戦で敗れたものの、一つ一つ壁を破りつつある館高球児への期待が膨らみます。更に、剣道部は二年連続関東大会に駒を進め、古豪復活の予感を感じさせ、陸上部の関東大会出場者も年ごとにその人数を増やしています。ライフル射撃部は定番のごとく関東大会・インターハイに出場し、今年も活躍してくれました。また今年度は二人の女性アスリートが活躍した年でもありました。水泳部の藤田聡子さん。彼女は国体四〇〇メートルフリーリレーのメンバーに今年も選出され、昨季を上回る三位という好成績を残しています。もう一人はフェンシング同好会の池田未来さんで、お父さんの指導のもと関東大会・インターハイに出場するという快挙でした。

夏は、今年もまた猛暑の中、全員が課外授業に集中しました。そんな中、一年生と二年生が東日本大震災の被災地を訪れるという経験をしました。傷未だ癒えぬ東北の地に赴き、何を思い考えたか、それは全て彼らの人間性の厚みとなってくれと確信しています。そして、放送部がNHKでの全国大会へ、書道部が富山で行われた総文祭へと文化部の活躍もありました。

秋は三年生が部活動を引退し、二年生と一年生が主力となって各種大会に出場しました。来年度に向けて、剣道、ライフル、陸上、などが好成績を残しており、バドミントンが県大会ベスト８に名乗りを上げたのも素晴らしい結果だと思えます。

〇 卒業生について

冬は、これからが本番。三年生の受験シーズンが今年もまたやってきました。一年間、館力祭、球技大会と館高の中心として頑張ってきたパワーを遺憾なく発揮し、有終の美を飾ってほしいものです。

卒業生の大学入試の結果はすばらしいものでした。国公立大学合格者が三五名(うち現役一二四名)、私立大学合格者が六三二名(うち現役五九一名「延べ」)です。国公立の数については平成の時代になって新記録ですし、東北大、お茶の水大、名古屋大、筑波大など難関大学にも合格しています。私立大学は明治、立教、中央、東京理科など難関校に一〇〇人を越える数が合格しています。「館高生展るべし」。これが私の印象です。一月の大学入試センター試験の結果は平凡なものでした。可もなく不可もなく。国公立一〇〇名の大会はどうかなと予想していましたが、予想に反して前期試験で九九名、中期、後期試験で二五名の合格者を出しています。これがなぜすごいのかというと、三月初旬まで生徒たちの伸びが止まらなかったからです。つまり、最後まで伸び続けたのです。「伸びる高校 下館一高」の伝統を今年も証明してくれました。最後まで諦めず、自分を信じて努力した生徒たちの姿には脱帽です。

〇 変化することについて

学校は、誰よりも不易なるものの価値を知り、それを伝えることを使命としています。しかし、いかに伝えるかは難しく、このことにいつも頭を悩まします。難しいのは生徒の実態が変化していくからで、学校はその変化に対応して常に新しい試みをしていかなければならない。昔ながらの方法に頼りきっていると、すぐに退化していきいます。バランスを考えながら変化することを恐れず、生徒を伸ばしていけたらと思っています。

同窓会便り

テクノ三十八回(下館第一高等学校工業科電気科昭和三十八年度卒業)

小林 幹雄

平成二十四年十一月九日に行われた今回の卒業五十周年同窓会は、数名の幹事が、半年近く前から、それぞれ忙しいなか、何度か打ち合わせを行い企画しました。卒業後五十年が過ぎましたが、三年間素晴らしい思い出を作ってくれた学校に集合し、あの頃の記憶をたどりました。

下館駅から下館の町を思い出しながら歩いて学校に集合してくれた、滋賀県近江八幡から参加してくれた小嶋君、本当に有難うございました。

学校では、校長、教頭先生のご配慮により、美しい事務員様に丁寧な案内をして頂き、その後の懇親会に、思い出の華を咲かせることが出来ました。有難うございました。現在下館第一高等学校工業科電気科はなくなってしまいました。が、あの頃のまま残っていた体育館と、体育館西側にある大きな銀杏の木が、五十年前

よりも少し小さくなったような気がしました。生徒数四十八名、参加十六名、欠席八名、連絡なし五名、住所不明十一

名、物故者八名。二年後の七十歳の同窓会を楽しみにしています。



平成二十四年 紫西同窓会 水戸支部 総会報告 支部長 大和田 實 (二十一回卒)

平成二十四年九月二十六日ホテルレイクビュー水戸で幹事会を開催し、十一月十六日に総会並びに懇親会をした処、ホテルの都合で十一月十五日が空いていると云う事で、今迄は金曜日に行っていたのを今回は木曜日に開催と成りました。十一月十五日に例年通りホテルレイクビュー水戸で総会並びに懇親会を十八時三十分より開催しました。学校より原学校長(四十八回卒)同窓会より中山会長(三十一回卒)の御来賓を頂きました。定刻に会員三十名招待者二名計三十二名にて例年通り卒業回数毎の席で一年振りの再会と和気藹藹の内進行しました。本年は職場関係での出席が少なく、昨年より出席者が減少したのが残念でした。学校長より学校の進学・部活動について報告がされ、最後に創立九〇周年の記念式典の概

容が有りました。中山会長は、在学時代経験した事について記念誌に寄稿して貰いたいとのお願いがありました。学校長は、同窓生の人や皆と打ち解けていました。愉快に雑談中でありましたが、中締めとして校歌斉唱万歳三唱をして二〇時三〇分解散となりました。

会としては、遠方より学校

長・同窓会長が出席して下さいますので、もう少し出席率を良くしたいと反省会に諮り、どうしたら出席者が多くなるかを検討したいと思っています。会員皆様にも水戸在住は勿論、水戸市に通勤している同窓の方にも声を掛け合って、大勢の方に出迎えていただき楽しい時間を過ごしてもらえればと思っています。

